

A. メルッチの“未発の社会運動”論をめぐって

— 3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求 (3)—

新 原 道 信

目 次

1. はじめに——社会のもっとも奥深くにある知覚のメカニズム
2. “ごくふつうの人々”の「草の根のどよめき」
3. “境界領域を生きる人 (gens in cunfinem)”
4. 「個人化」し「脳化」する社会における「選択のジレンマ」
5. “生体的関係のカタストロフ”と“社会的痛苦”——「闘技場 (arena)」としての身体の応答が新たな社会を創る——
6. 生体的関係的な想像・創造力 (Biotic, relational imagination and creativity)
7. 結びにかえて——惑星社会の諸問題に回答する“未発の社会運動”——

社会運動は、まさに、個人とシステムの諸装置との境界領域に位置づけられている。これこそが、現代の集合行為に対する私の問いとそれへの理論的アプローチの枠組みであり源泉でもある。……運動は、その社会のもっとも奥深くにある知覚のメカニズムにふれるものであり、社会のフロンティアにおける変化と同時に生起するものである。……社会運動は、事実上、ある社会においてなにが生起しつつあるかを示す指標であり、こんにちそれらは、多様な仕方、国民社会そしてわれわれのグローバル・システムといったものの社会の変化のプロセスの核の部分を表しだしてくれるのである。

アルベルト・メルッチ『プレイング・セルフ
——惑星社会における人間と意味』より
(Melucci 1996a=2008: 201-202)

1. はじめに——社会のもっとも奥深くにある知覚のメカニズム

いま起りつつあるグローバルな社会文化的プロセスをどうとらえるのか。「流動」や「無形」「不定形」,「水面下」「不可視」のプロセスは、微細に、秘めやかに、個々人の奥深いところで潜在し、すでに在る現実の中に、生起し続けている。本稿は、筆者がメルッチ夫妻 (Anna e Alberto Melucci) とともに見てきた、1980年代以降のイタリア・ヨーロッパ社会の“毛細管現象”¹⁾から、社会運動の背景を考えることを眼目としている。そしてまた、2001年9月12日に58歳の若さでこの世を去ったアルベルト・メルッチ²⁾を追悼し、その学問的な“願望と企図”³⁾を継承することを目的としている。

「差異を産出する複合社会」の「可能性」の側面に注目する通常グローバル社会論に対して、自然や資源の有限性、極度にシステム化した社会の「限界」に着目したメルッチは、想像したり把握したりすることが困難な“惑星社会 (the planetary society)”への洞察が(倫理にとどまらず)論理的必然となった社会を私たちは生きていた。惑星社会の構造と動態、そこから生じる諸問題は必ずしも「明晰」「判明」ではない。惑星社会は、きわめて“複合・重合”的なひとつのまとまりをもった有機体として形成されており、問題は複雑さや微細さとともに立ち現れる。しかしそれゆえに、自分が属している小さな場 (いまこ

こで) から始める可能性を秘めている。“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society)” ことがこれからの学問の使命だとメルッチは、考えていた⁴⁾。

メルッチは、ミラノ大学において、個々人あるいは集団が結ばれ／切り離される社会的プロセスのなかでも、とりわけ意味が形成されるプロセスに着目して社会現象をとらえる「文化的过程の社会学 (Sociologia dei processi culturali, Sociology of Cultural Processes)」を講じていた。それは、「より目に見えやすい集合的な出来事」のみならず、病や死など、個々人にとっての「センセーショナルな出来事」も含めて、「日常生活における数々の体験」「諸関係の微細な網の目」のなかで創り出されている社会文化的过程をとらえたいと考えていたからだ。

人々の情緒や情動的な体験は、「集合的な出来事」や社会的な「大変動」とは切り離され、「単なる断片」とされてしまいがちである。しかしその、見えにくい、「諸関係の微細な網の目」は、「より目に見えやすい」「センセーショナルな出来事を解き放つ」社会文化的过程として“衝突・混交・混成・重合の歩み (percorso composito)” をつづけている。ある特定の「出来事」の背後には、“未発の社会運動 (movimenti nascenti, nascent movements)”⁵⁾ とでも呼ぶべきものが、「伏流水」のように存在しているのである。

白血病を発症してからのもっとも大きな旅となった2000年5月の日本滞在中⁶⁾、メルッチから、「昨夜は比較的体調がよかったので、頭に浮かんだことを吹き込んだよ」と言ってカセットテープを手渡された。そこには、「リフレキシヴな調査研究にむけて」というテーマでの語りが録音されていた。調査における二元論をこえていくこと、すなわち、「観察主体と観察対象との距離を増大させる試み」と、「観察主体と観察対象との距離を縮める試み」から“ぶれてはみ出す”こと、「同

ジフィールドで調査という体験をともにするプレーヤー」である調査者と当事者の関係性の動態、その場で実は起こっているメタレベルのコミュニケーションを把握することをめざすという内容だった (Melucci 2000d=2014)。メルッチがもし存命していたならば、やろうとしたであろうこの試みを継承することが、私たちの課題であり、今日の社会文化的过程の意味を読み解く“基点／起点 (anchor points, punti d'appoggio)” になると考えている⁷⁾。

この試みはまた、1994年から深くかわり、彼の病発後、とりわけ1999年以降は、およそ三ヶ月に一度の割合でミラノに通い、病とのたたかいに「風」の時が来るのを待ち、“共感・共苦・共歎 (compassione)” の時をともにしたメルッチとの“受難の深みからの対話 (dialogue with passion of obscurity and abyss)”⁸⁾ でもある。以下では、遺されたテキストである『プレイング・セルフ』⁹⁾ と、メルッチが折々に語った言葉、表情、しぐさ、シグナルなどから、彼がどのように「社会のもっとも奥深くにある知覚のメカニズム」にふれようとしたのかを辿ることとしたい。

2. “ごくふつうの人々” の「草の根のどよめき」

前出の「リフレキシヴな調査研究にむけて」において、メルッチは、「距離を縮める」という戦略の問題点について以下のように述べている。

有機的知識人は、抑圧され、搾取され、より弱い立場に置かれた人々の側に立ち、その知的な認識を、実は自分たちのものとして持つべきであった当事者たちにもたらす。当事者たちは、有機的知識人によってもたらされた知的認識によって、自らを解放する行為へと向かっていく。ここにも、救済と伝導の物語が見出される。こうした知的伝統からの社会調査には、社会を変革するという意志が吹き込まれており、政治的にはラディカルな性格を持つようになっていた。それゆえ、調査者

と当事者の距離を縮める、さらには両者が一体化するという形態には、暗黙の内に、知的認識を持つものと持たざるもの、自らの識るところのものを伝導すべき使命を持ったものと、真実と認識が運ばれてくるのを待つものとの間のヒエラルキー（位階制）が残存しつづけた。

(Melucci 2000d=2014: 96-97)

この発言は、イタリアの知識人、社会運動の担い手の多くが、政治的文化的エリートの家系であったことと関連している¹⁰⁾。このイタリア社会の文脈で、メルッチは何とたたかおうとしていたのだろうか？

1994年に刊行された『時代のパサージュ (Passaggio d'epoca)』(Melucci 1994a)¹¹⁾は、彼の表現を借りれば、「自分のおじさんにも読んでもらえるように書いた」ものだった。同書は、生硬かつ精緻な論理の組み立てによる構成をその特徴としていたメルッチの著作群のなかにあって、きわめて異彩を放つものだった。残念ながら、ミラノでの書評会や、全国紙の書評欄においては、この新著は、ほとんど理解されなかった。

ミラノのメルッチ邸に寄宿した折に、出版されたばかりの同書の書評会のいくつかに、メルッチともども参加させてもらった。そこでは、全国紙の書評欄を担当する「著名な評論家や学者」たちから、「これまでの学術書とあまりにちがう」「一般向けのエッセイだ」といった言葉が発せられた。既存の社会構造認識から生まれるべき思想や理論を「想定」していた知識人にとって、同書における“想像・創造力はあまりにも「突飛」だったのだ。各種の批判に答えていたメルッチは、会が終わった後、表情をこわばらせながら、「どうだ。見たか。これが私の闘技場なのだ！」と言った。

メルッチを批判した「俊英 [の学者] (studioso brillante)」たちの多くが、家族はすべて同じ古典高校か理科高等学校を卒業し、医者、大学教授、政治家などになっている。誰もが「学校で一番」

であり、その子どもたちもまた「一番」である。「他の境遇で育ったひとがいるというのは頭ではわかるんだけど、実際に近くにはいたことがないの、本当よ」という言葉があたりまえのように発せられる。これに対して、メルッチが「自分のおじさん」に託して言葉にしようとしたのは、特定の組織・集団の幹部や思想家・理論家、活動家などではない、“ごくふつうの人々 (la gente, uomo della strada, ordinary simple people)”の“創造的プロセス (the creative process, il processo creativo)”であった。

大半の理論において、行為者は対象であったり記号であったりする。むしろ科学（構造主義、システム論、解釈学など）は操作の対象として、個の声を隠蔽する作用を持っている。これに対してメルッチは、ごくふつうの人間が日々特定の状況のなかで現実に応答し、その応答の連鎖のなかで自らの組成に変化を生じさせていく社会的プロセスは、「出来事」の背後に常態として在り続ける。社会の「草の根」として日々を奮闘する“ごくふつうの人々”は、「確かにそうかもしれない」と疑問を抱きつつも、日常の課題に追われて暮らし、「きっとこれでよかったんだ」と自分に言い聞かせる。しかし、突然、うすすらと感じていた不安、未発であったはずの事件が現実のものとなり、せっぱつまって、「やはりおかしい!」「いてもたってもいられない」となる瞬間がある。「草の根はどよめく (risuonando "l'erba pensante")」¹²⁾のだ。

メルッチは、この“ごくふつうの人々”の「草の根のどよめき」を一般論で語るのではなく、小さな“兆し・兆候 (segni, signs)”“シグナル (segnali, signals)”を集めていく時間とエネルギーを厭わなかった。そして、個々人の体験のなかにある「遺産」を決して無視せずに、微細に観て、聴いて、察して、それを理解するための“かまえ”としての理論を創る努力を徹底して行った。メルッチは、亡くなる直前まで、新しい社会科学の言葉を模索し、言葉になるかならないかのところで、想念を

出来る限り“描き遺す”ことを試みたのである。これは、イタリアの「知識人と社会運動」の枠組みから、“ぶれてはみ出す”試みであり、“いくつものもうひとつのコード (*Altri codici, Challenging Code*)”をもたらすことへの挑戦であった (Melucci 1984a; 1996b)¹³⁾。

3. “境界領域を生きる人 (*gens in cunfinem*)”¹⁴⁾

メルッチは、「書き手」としてのみならず、「話し手」としてもその“智”を発揮するひとだった。話すたびに、ちがう展開や発見があり、しかもその話の背後には、特定のひと・特定の場面が在る。自在に話をしていくなかで、ことなることがらを想起し、そこから新たな連想への扉を開いていく。

1994年9月に、北海道から京都までの旅をともにしたときのことだ。名古屋の地で、長良川河口堰建設反対運動の担い手の方たちとの出会いの機会をいただいた。社会運動を研究する社会学者であると同時に、アンナ夫人との協業で精神療法／心理療法の臨床家（セラピスト）でもあったメルッチは、イタリア語に通訳する前に、それぞれの方の立場や性格、言いたいことを見抜いた。「なぜそんなことが出来るの」と問いかけると、「これまで千人以上のひとたちと話をしてきた。その一人一人を生々しく覚えているんだ。私が書く文章の背後には、いちいち名前をあげてはいないけれど、特定の人との特定の場面の記憶があるのさ」と彼は答えた。そして、特定の相手と対面して話をする「対話」や、うちとけた状態で歓談するという意味での「談話」など、「特定の人との特定のことがらと結びついたかたちで、思い、考え、言葉にしてみることの自然な集積のなかで、洞察が生まれるのだよ」と語った。

またこれは、アンナ夫人から聞いた話だが、ハーバード大学のキャンパスのベンチで夕日を浴びながら、メルッチ夫妻は、二人でつづけてきたミラノでの精神療法／心理療法による知見

をどのような形で著作にとりまとめるかの話をしてきた。そのとき、アンナ夫人から、出会ったひとたちについての生々しい記憶が次から次へと湧き出た。この瞬間をとらえて、メルッチは、一見とりとめもない言葉の断片を、まるで蜘蛛の糸に吸い付けるようにして掬い取り、言葉のつらなりへと編み上げていったという。そして、『黄金の年代』(Melucci e Fabbrini 1992)というタイトルの本が生まれた。

社会運動研究と臨床社会学、療法的実践といった“多重／多層／多面”性をもった“境界領域の社会学者 (*sociologo 'di confine*)”としての固有性とその意味について、メルッチは、「二つの顔」という言い方で、以下のように述べている。

私の仕事の大半は、理論的なものだと思われているのですが、むしろ私は、特定の場所で、人々がなにを考えなにをしているのかを見て、聴くことに力を注いできました。そのために、私は大きくわけて二つのことをしてきました。

ひとつは、多くの研究者との間でおこなってきた社会運動などについての共同調査研究です。もうひとつは、20年以上続けてきた精神療法／心理療法の日常実践です。ここでは、様々な個人や集団、若者、老人、成人男女の痛み (*sofferenze e disaggi*) を聴くという体験と出会うことになりました。そしてまた、他者の痛みや苦しみとかわる仕事をするひとたち、臨床家、医師、看護師、社会福祉士などのひとたちのための専門教育の仕事にも携わってきました。……こうして私は、「二つの顔」をもって、つまり、「フィールドワーカー」(社会運動の調査研究者)と、「精神療法／心理療法の臨床家」(であると同時に臨床家のための教育プログラムづくりもする社会運動家)という二つの日常実践を通じて、他者と出会い、ひとびとが考え行為していることの意味を考え、現実にもふれるという営みをしてきました。しかし、それぞれの専門性の境界はきわめて厳格であることから、この「二つの顔」をむすびつけていくことにはつねに困難がつきまわったのですが、なんとかこの「二つの顔」を近くにおき、対比・対話・対位をさ

せようとしてきました。

(Melucci 2000g = 2010: 56)

ここには、〈マクロな社会構造と社会運動の分析〉と〈ミクロな個々人の内面の心理分析〉という対立軸の間に立とうとしたメルッチの苦心（他者との対話と自己内対話の努力）が見て取れる。2002年10月にミラノで行われた追悼シンポジウムにおいても、トゥレーヌが「マクロな社会運動」について語り、パウマンが、フィヒテから現在に至る「ミクロな主体」を語った。この「分裂」のなかで、メルッチの社会理論には、マクロからミクロへの主題の転換があったとされ、「晩年のメルッチが、個々人の内面の問題に関心が集中し、社会運動の研究にとり組まなくなった」という批判もなされた。他方で「いやむしろ、個々人の行為のつらなりの中に社会紛争を見出すのが、今日の社会学者の役割だ。新しい社会運動の誕生を、“痛む”という行為の産出として見るべきだ」という意見とが対峙することとなった¹⁵⁾。しかし、メルッチは、この“規格外で型破り (fuori classe, endo-esogeno, outsider within)”の意味を以下のようにとらえてもいた。

……境界線をこえて移動することによって、私たちはことなる体験をし、自らの属している領域がもつ限界を“識り”、……境界線をこえると、同じものがことなる名前と呼ばれていたり、あるいは逆にことなるものが同じ名前と呼ばれていたりすることに気がきます。この「故郷喪失 (spaesamento)」とでも呼ぶべき体験は、じつは私たちの智や体験をより深めていく力となるものなのです。それゆえ私は、社会学的な調査研究においては、個の次元、社会に組み込まれている諸主体の内なる感情・情動の次元へと関心をむけてきました。精神療法／心理療法においては、逆に、個々人の深いところの痛みや苦しみが、いかなる社会的文脈、環境、関係の中におかれているかということに関心をむけてきました。

(Melucci 2000g = 2010: 56-57)

メルッチは、母語のイタリア語で考え、書く人であったが、それにもかかわらず、自らにとって「同郷」であるはずの言語や生身の現実を、まるで“異界 (un altro mondo/pianeta)”へと突然入り込んだ生物がするように、観察し、大づかみにして、その理解の「パサージュ」を表現する“異境の力 (una capacità “di confine”)" をもっていた。“異境の力”とは、まず第一に、“異境で生き抜く力”であり、第二に、その生の意味をふりかえることによって、複数の“異郷／異教／異境”の地を行き来し生き抜き、なおかつその意味を理解し表現しきるという意味での、“いくつもの異境を旅する力”を培っていく。そして第三に、穴だらけで、不備や欠陥があったとしても、おおかたの予想を裏切り、「同郷人」たちをはっとさせるような新たな見方 (nuova visione) を提示する。すなわち、異なる境界線の引き方、補助線の引き方を提示することでその場の“メタモルフォーゼ (変身・変異)”を誘発する力＝“異境を創り直す力”となる。「俊英」は、質の違い、色合いや肌理や木目の違いを問題とせず、論理の「筋」のみを追いかけ、「正解をはじき出す」が、これに対して、メルッチは、「骨組」(「筋」の全景)と「中身」の双方をつかみ、その関係、間柄を生々しく再現できる“境界領域を生きる人 (gens in cunfinem)”だった。

4. 「個人化」し「脳化」する社会における「選択のジレンマ」

メルッチはなぜ、多様な“ごくふつうの人々”の切実な欲求／要求に着目したのか。いまや、「私たちの社会的な世界は、完全に惑星規模のレベルにまで達しており、出来事はそれ自体として、あるいはそれらが生起する場所や人々だけにとって重要であるということは決してありえず、むしろそれらが世界システムに及ぼすシンボリックな強い影響が重要とな」っている (Melucci 1996a=2008: 198)。そこでは、「個人こそが、これまで伝統的な用語

で『社会構造』と呼んできたものの社会的な核になりつつあり、「個人化のプロセスは、単に心理学的なプロセスだけなのではなく、複雑／複合システムの『構造的』傾向」である。「これらのプロセスは、国家の活動、教育政策、コミュニケーション政策の結果として引き起こされ」、人々は、「個々の行為主体 (agent) として効率的に機能することが求められ、情報を処理する能力を伸ばして情報の流れに適切に応答していくように期待される」。社会的行為、経済的投資、支配形態は、ますます個人のレベルで行われ、国家・政党・家族・利益集団といった中間的構造のフィルターは弱まり、個人は社会的な圧力、巨大な構造や装置に直面し続ける。ここから「個人化／アトム化した社会構造と、強力で、顔の見えない、遠く隔絶した制度とを、間に立って媒介するレベルをどのようにして確立し直すのか、再構築するのか、という問題」が重要となる (Melucci 1996a=2008: 200-202)。

「個人化」と関わる議論は、ギデンズやバウマン、ベックたちの社会理論との共通性もあり、構造によって決定されるという立場から距離をおく「構築・構成主義 (costruttivismo)」の文脈で考えられるのだが、その一方で、理論の「骨組み」以外の部分には“ぶれてはみ出す”要素を読み取ることができる¹⁶⁾。

ここで語られている「個人」とは、(1) 情報システムの一部である。その情報システムは、個人を用いて、欠くことのできない貴重な社会的資源である情報の生産と流通の重要な結節点をつくりだしている。(2) これらの個人は、多かれ少なかれ民主的な近代国家および近代政治システムの内部に位置しており、意思決定のプロセスに参加している。(3) さらに個人は、個人の体験および社会全体に関わる問題双方の選択や決定を行う。たとえば生殖／再生産、遺伝子操作と関わる選択や決定は、科学、公共政策、文化のレベルなどで考察可能である (Melucci 1996a=2008: 204)。この

三つのなかでは、(2) が、これまでの社会運動論との関わりでとらえることが可能な、“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society)” 要素と考えられるが、(1) と (3) は、新たな枠組みを必要としている。とりわけ(3)は、他の理論家たちとは異なる目配りがあると考えられる¹⁷⁾。

メルッチは、(1) の「端末」と関わって、「高度に複雑／複合的な惑星システムの端末」が直面する「選択のパラドクス」について以下のように述べている。

選択は、私たちの時代の不可避の運命である。どこに物理的に居を構えていようとも、私たちはいつも同時に、ニューヨークの住人であり、パリの住人、あるいはロンドン、サンフランシスコ、東京といった、現実のあるいは想像上の大都市の住人である。大都市は、相互に依存しあう高度に複雑／複合的な惑星システム (highly complex planetary system) の端末である。私たちはコスモポリタン文化へ象徴的に包摂されざるを得ない。コスモポリタン文化は、私たちが体験できる世界を拡張し、多重／多層／多面化する一方、同時に複雑性 (complexity) を突きつけ、選択を迫る。複雑性とは、分化／差異化、高速性、頻発する変化、そして行為機会の拡大を意味する。

(Melucci 1996a=2008: 62)

この過剰な「選択のパラドクス」¹⁸⁾の問題は、(3) とも関わり、さらに、人間の境界をめぐる「決定」(「人間的な自然への遺伝子的介入」というイシュー) にまで深化していく。技術革新と高生産性の追求による「成長」「発展」は、たとえば原子力がそう信じられたように、金融工学、バイオ、ナノ、IT、神経科学などの「複雑性の超高度化したテクノロジー」によって「宇宙の力を人間が統治する」という「夢」と結びついていた。手近なところにある資源は枯渇していったとしても、新たな「エネルギー (オイルシェール、シェール

ガス、メタンハイドレート、レアアース)」が地下や地底や海底に広がり、あるいは分子や原子、さらには素粒子レベルまで含めたナノ世界への遡及や、地球規模のシステム化やネットワーク化によって、まだまだ私たちには、新たな「原野」「フロンティア」「外部」, 「前人未踏の地 (no-man's-land)」が開けていくのではないかという期待がなされる。そしてまた、科学技術は、モノに向けられるだけでなく、ココロやコトバ、人間や社会をどう認識するかという問題にも向けられるようになった。科学技術という「武器」をもった社会システムは、個々の人間の意志や意図をこえ、それ自体の力で独自の方向性や法則性をもって動いていくようになり、そこに生きる私たちは、社会システムを構成する「端末 (ターミナル)」の「点」となる一方で、遺伝子操作・産み分け・クローンなどによって「人間の境界線は揺らいでいる (Cf. 新原 2013a; 2013b)。

メルッチは、認知科学さらには脳科学にも深い関心を持ち、このような意味での「個人」が抱える問題を、「脳化」という観点からも考えていた。

私たちは、身体を操作する力量が増大していくような社会を想像することが可能である。というのも、遺伝子の構造や情動をつかさどる化学物質のなかへと深く入り込んでいくという事態は、もはや単にSFの話ではなく、予見可能な未来の現実的可能性だからである。……複雑／複合システムにおいて私たちは、人間の器官が過剰に知能化されていく事態に、そして人間の能力が機械へと移転されていくという事態にさえ直面している。このことは人類の大脳皮質の力をさらに拡張していくことに寄与していくであろう。こうして集合的頭脳なるものが、過剰に脳化を推し進めていき、それが今や私たちの科学技術のなかに深く埋め込まれていくことで、それとは別の人間の能力である感情、情動、動き、生物としてのリズムに関わるものすべてが蝕まれていく。

(Melucci 1996a=2008: 209)

ここでメルッチが着目していたのは、「自然の脱自然化 (denaturalization)」と「コンフリクトの文化化 (culturalization)」, 「個人化」「脳化」に「端末」として適応していくことがもたらすアンビヴァレンス (ambivalence) である。プログラムを生み出すプログラムを創出した人間は、社会というシステムを“発明”し、生物としての自らの閉じた定常系のシステムを破壊する／革新するというアンビヴァレンスを抱えてきた。生物として系統発生／個体発生のなかにある人間は「例外」や「変異」によって進化するが、拡大された身体としての国家社会は機械化 (官僚制化) していく。

しかし、上記 (2) の「意思決定のプロセスに参加」する個人が、システムに組み入れられていること (incorporated) の「確かさ」は、その一方で、個々人の内面において、意識されないがゆえに語られない、あるいはうっすらとは意識されてはいるのだが言語化するにはいたってなくて語れない、こだわりやひっかかりを同時に生み出すとメルッチは考えていた。

5. “生体的関係的カストロフ”と“社会的痛苦”——「闘技場 (arena)」としての身体の応答が新たな社会を創る——

いまやカストロフは、単に自然の問題ではない。単に核の問題でもなく、人間という種そのものが直面する、生体そして関係そのもののカストロフとなっている。いわゆる「先進社会」のより先端部分で暮らすひとたちの半分が『悪性新生物』という異物によって死ぬ。さらにその半分は、心疾患で死ぬ。これはまさに、現代社会のシステムがそこに暮らすほとんど四分之三の人々の生体に社会的な病をもたらすという「劇的な収支決算」となっている。この個々の生体のカストロフという面から現代社会をとらえなおさねばならないと私は確信している。まだ多くのひとによっては語られていないことなのかもしれないが、この“生

体的関係的カストロフ (la catastrofe biologica e relazionale della specie umana)”は、まさにより深く根本的なものだ。(Melucci 2000g = 2010: 51)

上記の言葉は、「今日の社会紛争，社会運動，意味の産出にとって，もっとも重要な闘技場 (arena) である身体」というテーマで行われた2000年5月のセミナーにおいて発せられた言葉である。聴衆とのやりとりのなかで、「象徴化された身体を生身の身体から分離してしまおうとすれば、そこからカストロフへとむかってしまう」と口にした途端，語りのリズムは急転し，“生体的関係的カストロフ”の言葉が湧きあがった。ホテルで強い制ガン剤を飲んだ後に講演会場にやって来て，喉の奥からかろうじて声を発している生身の一人の人間から発せられたところの，整序された「身体論」と，「パッションとともに」語られた「生体的関係的カストロフ」の間の，“継ぎ目や裂け目”が顕わになった瞬間でもあった¹⁹⁾。

社会(システム)は、「制御」「不確実性への対処」をしつづけ、アイデンティティは「永続的に，確立し直され，交渉し直され」つづけねばならない。「個人は，より自律的で，より自らにリフレクシヴで，より責任を担った応答力をもって，より多くの資源をもった社会的行為者として行為」しなければならない。個々人の内面にまで迫る圧力と操作によって，「新たな」病理や心理的トラブルがますます増加していく。さらには，「際限のない象徴的可能性(財，関係性，情報)にさらされることによって，想像された世界とこれらの可能性への実際上のアクセスとの間に衝突が創り出される。……象徴的な刺激を過度に浴びることによって育まれた夢や期待と比べて，必然的に劣ることになる。その結果，欲求不満や喪失が，より広範囲かつ頻繁に体験され，新たな心理的トラブルを助長している」(Melucci 1996a=2008: 199, 201, 206)。

これはいわば“システム化の痛み”，“社会的痛苦 (patientiae, sufferentiae, doloris ex societas)”²⁰⁾である。こうした「痛苦」は，沈黙，不安，苦悩，自殺，アルコール依存，薬物依存，病，狂気……さまざまな形で，個別的な“心身/身心現象 (fenomeno dell'oscurità antropologica)”として現れる。確かにそこには在る。しかしその組成があまりにも複雑かつ複合的，しかも個別的で深いところのものであるがために，同時代を生きるものの内面における「変動」を，想像・察知したり，表象・証言したりすることは，きわめて困難である。

身体は，「過剰に文化化された社会システム」と「身体に根ざした人間体験の根源性」が“衝突・混交・混成・重合”する「闘技場 (arena)」となっている。「私たちの文化が身体化 (bodilization) へ向けて徐々に移行しているのは，『解放』のプロセスでもなければ，ただひとえに新たな合理化や隠された操作の形式であるというわけでもない。そこには深い矛盾の種子が内包されている。なぜなら身体に根ざした体験は，誰に対しても譲渡不可能で，ただ個人にのみ属するものであり，個人だけが身体を『実践』する ('practice' the body) ことができるからである。体験に根ざした身体へのアプローチのプロセスが，新たな自覚の形態を通じて作動し始めたならば，それを再び完全に制御することは不可能である」(Melucci 1996a=2008: 208)。

ここでの身体は，身体論の「対象」ではなく，対話者となり得るべき生身の身体である。また，実践・論はなく，いわば，“思行(思い，志し，言葉にして，考えると同時に身体を動かしてみる)”，生身の動きである。身体感覚・皮膚感覚を含んだ抵抗がこれまでの時代以上に重要となり，自らの身体の声を聴こうとしないものは，他者の(身体の)声を聴くことができないという循環の構造をもつ“聴くこと”²¹⁾と結びついている。だからこそ，この個々人の内面，身体の内なる社会

変動の声を“聴くこと”が、社会変動そのものにふれることへとつながるのだとメルッチは考えた。

1960年代後半、「イタリアの熱い秋」のなかで、社会学者F. アルベローニ (Francesco Alberoni) が提起した「発生期 (stato nascente)」は、社会運動におけるミクロナ動き (情動的な体験) とマクロナ動き (集合行為) の結節点となっている「場」を表そうとするものだった (Alberoni 1968; 1989)。心理分析と構造分析を架橋するという試みは、その二つのアプローチに実は通底していた、社会運動の生成期・成長期・沈静期を「線的」にとらえるという枠組みに拘束されていた。

しかしながら、1968年以降の“道行き・道程 (passaggio)”と重ね合わせて考えてみるならば、ことなる社会認識の文脈でとらえかえされることになるだろう。「9.11」からアフガニスタン、イラク、世界金融危機、さらに東日本大震災と、システム化・グローバル化がもたらす個人々の“社会的痛苦”に起因する社会紛争と社会危機はきわめて深刻な国際社会問題となっている。こうした複合的問題 (the multiple problems) は、可視的な制度等に着目する「国際・社会学」あるいは「地域・社会学」、可視的な出来事を対象とする社会運動論でとらえきれなくなってきた。膨大な事例研究を基礎づける理論と方法の不十分さが指摘されており、「国際社会そのものに関する学」、システム化・グローバル化する地域社会で現に起こりつつある動きをとらえる理論・概念・カテゴリーが求められている。

グローバル化のプロセスが、同時に身体レベルの操作を深化させていくことで、「狙いを付けた成果が全て生み出されるわけではないし、かえって逆効果になるときもある」(Melucci 1996a=2008: 211) という「統治性の限界 (the Limits of Governmentality)」を生じさせている。一見かかわりのなさそうな、些末で“端／果て”の意味しかもたないとされていたものが、それぞれに固有の動き方をしていき、同時に多方向的に、複数の異なる

仕方で、“メタモルフォーゼ (変身・変異 change form / metamorfosi)” していくということが、むしろ常態となりつつあるという、現代社会に固有の「条件」となっている。ここから以下のような理解が出てくる。

社会集団の間には、多岐にわたる方向性が存在しているが、エリートたちの内部でも矛盾が存在している。複雑／複合社会における社会的フィールドは、多面的で容易には統一されえない。それゆえ私たちは、社会運動を解釈するために、今まで以上に分節化された枠組みを必要としているのである。……確かにこれらの集合行為の形態は、日常生活のなかの個人の体験と強く結びついているがゆえ、一見するととても弱々しく、社会の構造やその政治的意思決定などには、ほとんど影響を及ぼさないかに見える。しかし実際は、その見かけの弱さこそ、分子のように個人の生活に浸透してくる権力に対抗する最も妥当な方法なのである。……差異を尊重することと、世界システムをグローバルに統合しそれを作動させていく必要性とを分離することなどできない。私たちにできることは、これらのジレンマに対処するための様々な政治的解決策を講じることのみである。だから、私たちの生のなかでも、政治のなかでも、勇気と希望が私たちの同伴者となるであろう。

(Melucci 1996a=2008: 211-213)

「見かけの弱さ」の弱さには意味がある。“生体的関係的カストロフ”のなかで、「分子のように個人の生活に浸透してくる」ミクロ権力に対して、“毛細管現象”のレベルで起こっている「草の根のどよめき」を“聴くこと”——システムの変容から個人、身体の意味変容という、人間と社会の“深層 (obscurity, oscurità)”に降り立ち、“毛細管現象”から社会を新たな方向へと突き動かしていく“深層のアウトノミア (the Obscurity of Autonomia)”²²⁾ 構築の途上で、メルッチは夭逝した。

6. 生体的関係的な想像・創造力 (Biotic, relational imagination and creativity)

いまの状況になって、身体の奥から詩の言葉が湧いてきた。痛みと苦しみの中から紡ぎだされた言葉、すべてが削ぎ落とされなにひとつ余分なものをまもっていない砂漠のような言葉は、実は希望なのだ。……短い時間、アルベルトの身体は、ソファにすわるため必死でたかかった。周りのところ許せるひとを気遣い、ゆっくりと、やわらかく、なにひとつ騒音のない、砂漠のような透明さにつつまれた時が過ぎた。ありったけの表情と、やわらかい手の厚みと、抱擁で、できるかぎりお互いの身体にふれた。

1999年9月8日と2001年3月29日、
ミラノのメルッチ邸で

わたしは、あいかわらず、その日その時その瞬間を、希望をもちつづけようとしつつ、たたかいつつ、あるいはただ、この河の流れに身を任せようとしつつ、生きている。

2001年6月28日　メルッチから新原道信への
私信より

筆者は、サルデーニャ北部の中核都市サッサリに長期滞在し、「1987年の原発停止をめぐる国民投票」運動を主導した若手知識人グループへの参与観察を行い、彼らの会議や集会などに参加し、行動をとらした。そして国民投票の結果、イタリアのすべての原子力発電所が廃止された。

イタリア・ヨーロッパ社会にとって、1987年と2011年の二つの国民投票（そのいずれもが原発停止と関わるもの）は、きわめて大きな「事件」であった。「1987年」の国民投票成立以後、「目に見える社会運動」（メルッチ）はもはや顕著なものではなくなり、イタリアの諸地域においても「個人化」と「新自由主義化」の傾向は強まっていくように思われた²³⁾。しかしながら、イタリア社会の複合的な危機が深刻化するなかで、大学や病院などの公共施設の「民営化」の方向に反対する運

動が再び活性化し、とりわけサルデーニャにおいては、牧畜業者によるデモを学生・若手大学教員が支援するという、いままでにないクロスカルチュラルな運動の形態が見られるようになる。

さらに、「3.11」直後の2011年5月には、サルデーニャへの原発建設を主張するバルルスコーニ首相への反対運動がサルデーニャで起こり、住民投票により原発建設反対が決定された。同年6月には、「『3.11』の影響はあれども（投票成立に必要な）50%の投票率確保は困難」との予測が覆され、（投票権を有する）国民の54.79%が投票、原発凍結賛成票94.05%で、「原子力発電の再開を凍結する国民投票」が成立した。他方で、イタリア内外の研究者たちは、1980年代から現在に至るイタリア社会の“変化の道行き”の理解についての理論的・実証的困難に直面せざるを得なかった。

チェルノブイリ以降の日常を生きたひとたちは、ずっと声をあげて運動をしつづけたわけではない。しかし、声を発し、直接的な行動をとらなかったその間も、日々の暮らしをたたかい、目に見えて言葉や行動をあらわしていないときでもまた、いつでも動けるような状態を保っていたということになる。ごくふつうのひとたちの、微細な動きが危機の瞬間に結晶化していく「条件」としての「限界を受け容れる自由」「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由」だ。危機の瞬間に何ごとかを想起し、さっと身体が動くということ。ある特定の瞬間の集合行動と、“個々人の内なる社会変動”の“道行き・道程”とは、どのようにつながっているのだろうか？

いまから思えば、1987年の調査では、目立った運動家からの機縁法で、かなりの部分をとらえることができた。これに対して、2011年は、誰がどのように考え、動き／動かなかったのかを辿ることがきわめて困難で、「旧タイプ」の社会運動家たちのかかなりの部分は、“毛細管現象”から取り残され、杳然としているように見えた。

メルッチは、研究者や社会運動家にとって、つかみどころのない“ごくふつうの人々”，その動き、沈黙、表情などに、「どのようにふれるという問題設定は私には必要ない，“生体的関係的カストロフ”のなかで、微細な応答しかできないとしても、それでもたたかいつつあるのは、私自身でもあるからだ。“他者はわれわれなのだ (Gli altri siamo noi)”と”と言うかもしれない。「かれらは他者 (the other, gli altri) だ」「異物 (corpi estranei) だ」「異形 (stramorfo) のものだ」という「大前提」を“廃棄 (dump[ing])”してみる。“他者はわれわれだ”だという、一見、錯乱した理解の“端／果て”に、“異境を創起する動き (movimenti emergenti di ricomporre i confini)” “創造的プロセス (the creative process, il processo creativo)”を見出そうとしたはずだ²⁴⁾。いく人ものもう一人の自分でもあるような“ごくふつうの人々”が、それでもなお、“生体的関係的想像／創造力 (Biotic, relational imagination and creativity)”を生み出すことに賭けただろう。

……過去においては、変化や革新、あるいは支配的傾向への異議申し立ても、数量に換算されてきました。しかしいまや多数であることが必ずしも必要ではない世界へと突入しているのです。いまや私たちが暮らす相互依存的で相互作用的な世界においては、限定されたものやマージナルなものもまた／かえって効果的であったりもするからです。この認識が私に楽観主義の態度をとらせる根拠となっています。……私が楽観的なのは、深く社会的な理由からなのです。

2000年故郷リミニでのシンポジウム
「リミニ人の省察」での発言より
(Melucci 1996a=2008: vii)

7. 結びにかえて——惑星社会の諸問題に回答する“未発の社会運動”——

あらためて、メルッチが遺した言葉、表情を想起し、その“願望と企図”を継承するのを感じ

ている。イタリア社会の動きに即しての叙述は、また稿をあらためねばならないが、“毛細管現象”と関わる当面の理解を以下に記したい。

① “毛細管現象 (fenomeno della capillarità)”:

個々人の心意／深意／真意のレベル，“深層 (obscurity, oscurità)” “深淵 (abyss, abisso)” で起こりつつある“毛細管現象”は、“惑星社会”においては、グラムシが把握しようとしたところの、社会の“深層／深淵”における“毛細管現象”と強く連動している。この、社会にとっての「指先」である、特定の個人の“深層／深淵”で始まる“毛細管現象”は、“個・体 (individuo corporale)”と“生・体 (corpus corporale)”の層を包含する“生体 (organismo vivente)”において、“生体的関係的カストロフ (la catastrofe biologica e relazionale della specie umana)”を“知覚”することで、「せっぱつまって」起こる。

② “胎動 (movimenti dell' oscurità antropologica)”:

これまで構造やシステムに組み込まれることで確保していた生活が、その生活の「安定」や「豊かさ」の代償に“生存”そのものが危機に瀕するという状況(リスク)を察知・体感し、身体に刻み込まれた社会の構造から、「ピボット・ピン」のように“ぶれてはみ出す (deviando, abweichend)”ことへの不安をこえて一步を踏み出してしまふ。これは、個々人のなかで、集団のなかで、地域のなかで、ひとつの微細な“兆し・兆候”でしかないが、同時多発的に、非規則的に、“雑唱”のかたちで起こることによって、地域小社会において／地域をこえて、“多重／多層／多面”の“胎動 (movimenti dell'oscurità antropologica)”として現象していく。

③ “無償性の交感 (accettazione di gratuità)”:

個々人の“深層／深淵”で、生存の単位としての地域小社会の内部の“毛細管現象”として現象する“胎動”は、資源動員のかたちとは相対的な距離を持ちつつ、“無償性の交感 (accettazione di gratuità)”²⁵⁾として現象する(たとえば、「いのちをつなぐ」のだという意識で行動する)。これは「承認をめぐる闘争 (lotta per riconoscimento)」としての「相互承認 (Anerkennung)」でなく、“出会い”²⁶⁾，“ただ受けとめる (accettare)”という性質を持つ。「他者、差異、還元できないものを承

認する (recognition of the other, the different, the irreducible)」こと、「差異のただなかで、ともに生きていくことの責任／応答力とリスク (the responsibility and the risk of co-living amongst the difference)」を引き受けることでもある (Melucci 1996a=2008: 177-178)。

“無償性／無条件性／惜しみなさ (gratuitousness, guratuità)”の“交感／交換／交歓 (scambio, Verkehr)”, そこからの“共感・共苦・共歓 (compassione)”は、“ただ受けとめる”という一見受動的な行為のなかに、“低きより (humility, humble, umiltà, humilis) をもって、高みから裁くのではなく、地上から、廃墟から”, 遮蔽しようと思えばできないことはないと思われることがら、識ることの恐れを抱くことがらをあえて境界を越えて選び取る、あきらかなる介入 (intervento) の暴力を自覚し罪責感とともにその自らの業を引き受けるという“コミットメント (s'engager= 存在との契り)”が埋め込まれている。

④ “個々人の内なる社会変動 (metamorfosi nell'interno degli individui corporeali)”と“未発の社会運動 (movimenti nascenti)”:

個々人の“心意／深意／真意”, “深層／深淵”で起こりつつある“毛細管現象, 胎動, 無償性の交感／交換／交歓”——このような内なる変動／相互作用をともなつて, “かたちを変えつつ動いていく (changing form)”人間が, “見知らぬ明日”に直面し, ぶつかり／つながり／つらなる。そこでは, 二者から三者へのつながりが突然創られ, 「集合的プロセス」が立ち現れる。ごくふつうのひとつとによって危機の瞬間に“想起／創起”されたものなから, “創起する動き”となるものがある。“創起する動き”とは, 危機の瞬間に“居合わせ”, その特定の時と場でのみ想起される“智慧”, “臨場・臨床の智 (living knowledge)”を突き合わせていく動きのなかで創起される「創発 (emergence)」であり, 生まれ続ける動きのなかに“創起する動き”が散発的に立ち現れる。つまりは, ひとつのうねりのなかに, 一者と二者と三者 (個々の身体と個々人の関係, 地域, 社会) の相互作用とそれぞれの“深層／深淵”における微細な動きが存在している。

メルッチ夫妻は, 「この社会の端／果てに棲息

している微細な体験, 毛細管現象のすべてに, 社会の大きな変化の種子が含み込まれているということを考えつづけ, 他者を理解しようとし続けることに絶望しない」という試みをしつづけた。モダニティが終焉する時代の“社会的痛苦”がもたらす社会的病の体現者として, そこから生まれる“毛細管現象 (fenomeno della capillarità)”は現にそこに／ここに在って, 呼吸しつづけていることを, メルッチは身体を張って伝えてくれた。その「未踏の真実の跡」「出会うべき言葉」に気付くかどうかは, 私たちに遺された「選択」である。

……

足跡を探し求めよう
アスファルトの道に
夜の闇を照らす
未踏の真実の跡を

「それでもまた夜は照らし出される
(Ancora s'illumina la notte)」

……

私たちは
このただひとつの
地へと向かう
用心深き使者だ
出会うべき
言葉だけを持っている

……

「兄弟であれば (Magari fratelli)」

メルッチの死後に出版され, 2002年の追悼シンポジウムでも紹介され朗読された詩集『熱気球 (Mongolfiere)』より

(Melucci 2002: 11, 18-19)

- 1) “毛細管現象 (fenomeno della capillarità)” “胎動 (movimenti dell' oscurità antropologica)” については, 本稿の第7節を参考にされたい。
- 2) 1943年にエミリア＝ロマーニャ州リミニで熟練労働者の息子として生まれ, ミラノ・カトリック大

学で哲学を学んだメルッチは、カトリック青年運動に参加し、ボローニャ大学で臨床心理学を学ぶアンナ夫人と知り合った。そして国立ミラノ大学大学院で社会学を学んだ後、パリに留学し、A. トゥレーヌ (Alain Touraine) のもとで社会運動を研究すると同時に、臨床心理学の博士号を取得する。J. ハーバーマス (Jürgen Habermas) や Z. バウマン (Zygmunt Bauman) との学問的交流を経てイタリアに帰国、サッサリ大学、トレント大学、ミラノ大学を歴任した。社会学の世界では、『現在に生きる遊牧民』(Melucci 1989=1997) などの著作が英語圏で紹介されることで、社会運動とアイデンティティの不確定性をめぐる研究がよく知られるようになる。その一方で、メルッチは、彼と同じくパリで臨床心理学の博士号を取得した臨床家 (サイコセラピスト) であるアンナ夫人とともに、自らも療法的実践に行いつつ、神経科学にも開かれた形で、現象学的な方向性をもったセラピスト (サイコセラピスト) の育成、さらには、日常性、欲求、情動、青年期の若者、創造性、メタモルフォーゼといったテーマに関する調査研究プロジェクトに取り組み、共同研究をすすめていったが、2001年9月、白血病でこの世を去った。

- 3) “願望と企図の力 (idealità e progettualità, ideabilità e progettualità)” は、想い願ひ続け、それを実現するための具体的方策を提示し続ける力、イタリア社会の文脈では、A. グラムシ (Antonio Gramsci), F. バザーリア (Franco Basaglia) や A. ランゲル (Alexander Langer) などの思想家・社会運動家もっていた“謙虚と確信 (umiltà e convinzione)” の力でもある。当面の戦いに勝利する (vincere) 力ではないが、ともに (cum) 困難を乗り越える (superare) 力、納得し確信し自らの過ちを悟る (convincersi) 力であり、その道程 (percorso, passaggio) への“誠実さ (fedeltà)”こそが人間の道 (真理) であるという“かまえ・流儀”, すなわち道を信ずる力でもある。Cf. (Langer 2011[1996]) (Basaglia 2000)
- 4) “惑星社会の問題に応答する未発の社会運動”が注目される契機となったのは、東日本大震災である。津波・震災・原発事故は、確率論的になされた想定によって社会を制御する理論と方法の限界を突きつけた。成長の限界と想定外のリスクのもとで現れる複合的な問題に応答し、諸個人の声を反映した地域

社会構築をするためには、深部からの要求をすくい取ることが必要となる (新原 2015d)。戦後体制の構造転換という日本社会と共通の課題を抱え、深刻な若年層の問題や財政危機、「民営化」反対の社会運動などが噴出するイタリアにおいても、惑星社会論と未発の社会運動論への注目が高まっている。メルッチと新原の議論 (Niihara 2003a; 2003b) を、イタリアの社会学者ボヴォーネ (Laura Bovone) たちが取り上げ (Bovone 2010) (Chiaretti e Ghisleni 2010)、新原がイタリアでの国際シンポジウムに招待され (Niihara 2011; 2012)、各方面から未発の社会運動論のさらなる展開と拡充が求められている。

- 5) “未発の社会運動”については、(新原 2003; 2006; 2012a; 2013a; 2014a; 2015b) などを参照されたい。“毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動”の整理については、(新原 2013a: 64-66) で行った。
- 6) 2000年5月14日の地域社会学会での記念講演 (於、関東学院大学) と5月16日の一橋大学でのセミナーの間であったと記憶している。記念講演では、事前に提出した原稿とはほぼまったく異なるかたちの話として「聴くこと」をテーマに話し、一橋大学では、メモすら持たない状態で、「身体」をテーマとして、言葉を発しつづけた。2000年5月のメルッチが直面していた「状況・条件」、言葉がかわされた場所と関係性によって規定される形で発せられた、conventionalな (会議の場あるいは論文の形式で語られる型どおりの) 言葉によってでなく、ある特定の状況に埋め込まれた (situational and conditional)、個々人の身体の内底で生じている喪失、変性、変質とそれに対する応答のつらなり、そこからつむぎだされた言葉による clinical な語りであった。Cf. (新原 2001; 2004) (Melucci 2000f=2001; 2000g= 新原 2010)
- 7) メルッチの遺稿は、新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』(新原 2014a) に収録した。彼の遺志である“リフレクシヴな調査研究 (Reflexive research, Ricerca riflessiva)”の方向性を継承し、現在は、“惑星社会のフィールドワーク (Exploring the Planetary Society, Esplorando la società planetaria)”というテーマでのプロジェクトをすすめている。Cf. (新原 2008b; 2011b; 2013b; 2014b;

- 2014c; 2015a; 2015c; 2015d)
- 8) “社会的痛苦”の“衝突・混交・混成・重合の歩み”でもある、このテーマについては、(新原 2015d)で論じている。ミラノに通った濃密な数年間のせいのか、2002年と2008年のメルッチ追悼シンポジウムで報告した後、生前のメルッチをよく識る聴衆の何人かから、「あなたのイタリア語の語り口がアルベルトにそっくりで、まるで彼がここにやって来て乗り移って話しているようだったわ」と言われた。しかし、これは、「代弁」「憑依」というよりは、「間」にあること、「交感／交換／交歓」の産物であったと考えられる。“交感／交換／交歓”については、(新原 2015c)と本稿の第7節を参考にされたい。
- 9) 発病する直前に準備し、出版した『プレイング・セルフ』について、メルッチは、「まるで病となる私の運命を予見して書かれたようだ」と自著について語ったことがあった。翻訳は、イタリア語版を参照しつつ、英語版のテキストに書かれていることを遵守したうえで、メルッチとの対話・談話、メルッチの想念とテキストの間に訳文の着地点を探そうとこころがけた。Cf. (新原 2008a; 2008b)
- 10) メルッチが最初に大学教員として着任した中世都市サッサリの例をあげれば、サッサリをもっとも特徴付けるのは、代々、政治家や学者、医者や弁護士になるという家系を中心とした、「政治階級」と言われる支配層が存在してきたことである。たとえば、グラムシの「同志」であったパルミーロ・トリアッティの古典高校の後輩で、「ユーロ・コミュニズムの旗手」と言われた政治指導者のエンリーコ・ベルリングエルの場合、父親は弁護士で国会議員のマリオ・ベルリングエル、弟のジョヴァンニ・ベルリングエルも医学部教授で国会議員、エンリーコのいとこのルイジとセルジオも政治家である。第8代イタリア共和国大統領となったフランチェスコ・コッシーガは、エンリーコのいとこであり、彼らに共通の親戚のアントニオ・セーニは、サッサリ大学学長、そして第4代大統領と首相を歴任している。アントニオの息子のマリオットもサッサリ大学教授から政治家となっており、エンリーコ・ベルリングエルの娘でジャーナリストのピアンカは、ジャーナリストから政治家へと転身したルイジ・マンコーニと結婚している。彼らはいずれも、サッサリ出身、地元の名門アズニ古典高校出身、あるいはサッサリ大
- 学法学部出身などの条件を満たしている。
- 11) 同書の構成は、「イントロダクション」に始まって、以下のようなものとなっており、『プレイング・セルフ』の構成を予感させるものであった：道行きでの言葉 (Parole di passaggio), 個人になる (Diventare individui), 差異 (Differenze), 時間に暮らす (Abitare il tempo), 治す・養生する (Guarire o prendersi cura), 責任／応答力 (Responsabilità), 私たちのような他者 (Altri come noi), コンフリクト (Conflitti), 民の力 (Democrazia), 驚き (Meraviglia), 夢と慣習 (Miti e riti), 補遺 (Appendice), イタリア (Italia), 旅の同伴者 (Compagni di viaggio)。
- 12) この言葉は、哲学者・古在由重 (1901-1990) の著書『草の根はどよめく』(古在 1982)を典拠としている。古在は同書のなかで、「グラスルーツ (草の根)」の意義と「現実路線」の背後の「基本的な矛盾」を論じている。「草の根はどよめく」というテーマで、2012年8月2日、サッサリ大学地域研究所35周年記念の国際セミナーにおいて、「Fukushima 原発事故：エネルギー選択、市民社会、生活の質」(Niihara 2012)という報告を行い、1987年の原発停止国民投票運動の調査以来、知己となった社会運動家たちと、「3.11以降の惑星社会」についての議論をしている。Cf. (新原 2013a)
- 13) ここでの議論は、「うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究」(新原 2016)の第7章においても試みている。
- 14) この言葉は、沖縄とサルデーニャでの調査研究に基づき、イタリアの社会学者 A. メルレル (Alberto Merler) との“対話的なエラボレーション (co-elabolation, coelaborazione, elaborazione dialogante)”によって錬成されたものである (Merler e Niihara 2011a=2014; 2011b) (新原 2011a)。
- 15) 2002年10月にミラノで行われたメルッチ追悼シンポジウムは、メルッチの恩師 A. トゥレーヌや、彼と親交の厚かった Z. バウマン、矢澤修次郎、新原道信等が招待され、国際社会学会会長 (当時) のミラノ大学教授 A. マルティネッリ (Alberto Martinelli) がホスト役となり開催された。Cf. (Niihara 2003a; 2003b) (新原 2004; 2010)
- 16) 2008年10月の追悼シンポジウム「A.メルッチから…現在のインヴェンション (A partire da Alberto Melucci…l' invenzione del presente)」での議論より。

- ここでは、メルッチと研究をともにしてきた共同研究者たちが報告し、新原は第一報告を行った (Nihara 2008)。同シンポジウムの経緯と意味については、(新原 2010) を参照されたい。
- 17) “生体的関係のカタストロフ”の時代の人間生態学については、(新原 2013a) を参照されたい。
- 18) 「選択のパラドクス」については、フィールドワークの成果をもとに、大西洋のカーボベルデ諸島にやって来る「ヨーロッパ人」たちが、「離婚や事業の失敗など、必要以上に聞かれたくないことを穿鑿されること」もなく、「選択」の「圧力」からも開放される「寄港地」として、カーボベルデを「発見」しようとするという側面について論じている (新原 2012b: 85-87; 2014a: 379-382)。
- 19) この2000年5月の一橋大学でのセミナーの経緯とそこで起こったことについては、(新原 2010) を参照されたい。
- 20) “社会的痛苦／痛み／傷み／悼み (patientiae, sufferentiae, doloris ex societas)”を、社会(科)学的に認識するときは、“社会的痛苦”という言葉をあて、生身の人間の“わがことがら”として体感する状況を表す場合には“痛み／傷み／悼み”という言葉をあてた。宗教や文学の対象であり生の意味と関わる根源的疼痛、不快の根絶・排除／不快との共存、あるいは緩和医療といったイシューと関わる心身の(徴候としての)疼痛とは区別して、社会学が対象とする相対的剥奪感、不安、不満、ちょっとした不具合 (piccoli mali) なども含めての疼痛として“社会的痛苦”を考えた。それゆえ、“痛み／傷み／悼み”と“社会的痛苦”(さらには、根源的疼痛や心身の疼痛)の関係性は、“衝突・混交・混成・重合”ということになる。 Cf. (新原 2009a)
- 21) “聴くことの社会学 (sociologia dell'ascolto)”については、(Melucci 2000f=2001) (新原 2001) を参照されたい。とりわけ病を得てからの、“臨場・臨床の智 (living knowledge)”である〈社会的疼痛の体現者としての病者でもある社会の医者〉については、(新原 2007) で詳しくふれた。
- 22) バルト海に位置するオーランドと沖縄の比較研究により、可視的な獲得の対象となっているオートノミー (自治・自立) の制度、それを支える根拠とされているアイデンティティ (集合表象)、さらにその基層として、オートノミーとアイデンティティを支え突き動かす“深層のアウトノミア”についての知見を、(新原 2006) でまとめている。
- 23) サルデーニャでは、「中道右派か中道左派のどちらかのグループから州代表 (知事) が選出される」という図式が崩れ、インターネット企業ティスカリの創業者 R. ソル、さらにはメディア王でもあるイタリア共和国首相ベルルスコーニの強力な支持を得た「無名の新人」U. カッペラッチが新たな州代表 (知事) となった。
- 24) このテーマについては、(Melucci 1984b; 1994b) に萌芽が見られる。微細な変動を掬い取る詩の言葉については、(Melucci 2000a; 2000b; 2000c; 2000e) が、娘たちへ／後に続く人々への遺言ともなっている。
- 25) 「無償性 (gratuitousness)」についてメルッチは、以下のように論じている。「日常生活の体験が展開する目下の環境においては、パートナーとの関係性とは別に、愛のもつ偶発的な性質が子どもたちとの関係にも影響してくる。生物学的な親子関係が自然の必然性から逃れるとき、親—子の関係性も、選択の無償性に基づくものになっていく。このことは、大人—幼児の関係性に深い変化をもたらす。子どもたちは、かつて描いていたような両親の生物学的な系統によるつながりではもはやありえず、また純粹に繁殖し養育する対象、つまり私たちが社会の価値や規範を託す器でもありえない。子どもたちは、いまや個人としての自律性を授けられた個人であり、愛の関係性のなかでのパートナーでもある。さらに言うなら、遊びの驚き、答えられない問いへの驚きを、私たちにいまなお学ばせてくれることのできるパートナーでもあるのである。」(Melucci 1996a=2008: 171-172)
- 26) “出会い”については、「他者との出会い」に関するメルッチの下記のような理解と結びついている。「……出会いの苦しみと喜びは、微妙な均衡の中にある。他者性の挑戦に向き合えるかどうかは、自己を失うことなく他者の観点を引き受ける力にかかっている。感情移入 (empathy) は、日常言語の中にいまや入り込んでいる用語であり、それは他者の近くにあること、他者の観点から物事を見ることのできるということを示している。しかしこれは往路にすぎず、空虚や喪失から自分を守らねばならない。私たち自身のなかにしっかりと錨をおろしたまま、私たちの自己と他者の自己との間の空白に橋を

架けるという力をもたないのであれば、そこに出会いはなく、単に博愛や善意があるにすぎない。出会いは、意味の二つの領域 (region) をいっしょにする。そしてそれは、私たちが調整している異なった振動数をもつ二つのエネルギーのフィールドを、互いに共鳴するところにまでもっていく。出会いは、苦しみ、感情、病を・ともにすること (*sym-pathy*) である。すなわちそれは、自らの情動や力のすべてをふりしぼって、内からわきあがる熱意をもって、喜び、高揚し、痛み、苦しみに参加すること・ともにすること (*com-passion*)、ある他者と・ともに感じている (*feeling-with-another*) ということである。ここで発見するのは、意味は私たちに帰属するものではなく、むしろ出会いそれ自体のなかで与えられるものであり、にもかかわらず、それと同時に、私たちだけがその出会いをつくり出すことができるということである。」(Melucci 1996a=2008: 139-140)

参考文献

- Alberoni, Francesco, 1968, *Statu Nascenti*, Bologna: Il Mulino.
- , 1989, *Genesi*, Milano: Garzanti.
- Basaglia, Franco, 2000, *Conferenze brasiliane*, Milano: Raffaello Cortina Editore.
- Bovone, Laura, 2010, *Tra riflessività e ascolto. L'attualità di sociologia*, Roma: Armando editore.
- Chiaretti Giuliana e Maurizio Ghisleni (ed.), 2010, *Sociologia di Confine: Saggi intorno all' opera di Alberto Melucci*, Milano-Udine: Mimesis Edizioni.
- Langer, Alexander, 2011[1996], *Il viaggiatore leggero*. Scritti 1961-1995, Palermo: Sellerio.
- 古在由重, 1982『草の根はどよめく』築地書館。
- Melucci, Alberto, 1984a, *Altri codici. Aree di movimento nella metropoli*, Bologna: Il Mulino.
- , 1984b, *Corpi estranei: Tempo interno e tempo sociale in psicoterapia*, Milano: Ghedini.
- , 1989, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Philadelphia: Temple University Press. (=1997, 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民: 新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店.)
- , 1994a, *Passaggio d'epoca: Il futuro è adesso*, Milano: Feltrinelli.
- , 1994b, *Creatività: miti, discorsi, processi*, Milano: Feltrinelli.
- , 1996a, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press. (= 2008, 新原道信他訳『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』ハーベスト社)
- , 1996b, *Challenging Codes. Collective Action in the Information Age*, New York: Cambridge University Press.
- , 2000a, *Zènta: Poesie in dialetto romagnolo*, Rimini: Pazzini.
- , 2000b, *Giorni e cose*, Rimini: Pazzini.
- , 2000c, *Parole chiave: Per un nuovo lessico delle scienze sociali*, Roma: Carocci.
- , 2000d, “Verso una ricerca riflessiva”, registrato nel 15 maggio 2000 a Yokohama. (= 2014, 新原道信訳「リフレクシヴな調査研究にむけて」新原道信編著『境界領域』のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部)
- , 2000e, *Culture in gioco: Differenze per convivere*, Milano: Il saggatore.
- , 2000f, “Sociology of Listening, Listening to Sociology”. (= 2001, 新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域——自己決定・協働, その主体 地域社会学会年報 13』ハーベスト社)
- , 2000g, “Homines patientes. Sociological Explorations (Homines patientes. Esplorazione sociologica)”, presso l'Università Hitotsubashi di Tokyo. (= 2010, 新原道信「A. メルッチの「境界領域の社会学」——2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 20号 (通巻 233号) において訳出)
- , 2002, *Mongolfiere*, Milano: Archinto.
- Melucci, Alberto e Anna Fabbrini, 1992, *L'età dell'oro: Adolescenti tra sogno ed esperienza*, Milano: Guerini.
- Merler Alberto e M. Niihara, 2011a, “Terre e mari di

- confine. Una guida per viaggiare e comparare la Sardegna e il Giappone con altre isole”, in *Quaderni Bolotanesi*, n.37. (= 2014, 新原道信「海と陸の“境界領域”——日本とサルデーニャを始めとした島々のつらなりから世界を見る」新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部)
- , 2011b, “Le migrazioni giapponesi ripetute in America Latina”, in *Visioni Latino Americane - Rivista semestrale del Centro Studi per l'America Latina*, Anno III, Numero 5.
- 新原道信, 1997『ホモ・モーベンス——旅する社会学』窓社。
- , 2001「聴くことの社会学のために——二〇〇〇年五月の“賭け (progetto)”の後に」『地域社会学年報13』ハーベスト社。
- , 2003「自らを見直す市民の運動」矢澤修次郎編『講座社会学15 社会運動』東京大学出版会。
- , 2004「生という不治の病を生きるひと・聴くことの社会学・未発の社会運動——A・メルッチの未発の社会理論」東北社会学研究会『社会学研究』第76号。
- , 2006「深層のアウトノミア——オーランド・アイデンティティと島の自治・自立」古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部。
- , 2007『境界領域への旅——岬からの社会的探求』大月書店。
- , 2008a「『グローバリゼーション／ポスト・モダン』と『プレイング・セルフ』を読む——A.メルッチが遺したものを再考するために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学18号(通巻223号)。
- , 2008b「訳者あとがき——「瓦礫」から“流動する根”」A.メルッチ, 新原道信他訳『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』ハーベスト社。
- , 2009a「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐって——古城利明とA.メルッチの問題提起に即して」『法学新報』第115巻, 第9・10号。
- , 2010「A.メルッチの“境界領域の社会学”——2000年5月日本での講演と2008年10月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学20号(通巻233号)。
- , 2011a『旅をして, 出会い, とともに考える』中央大学出版部。
- , 2011b「A.メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ——『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学21号(通巻238号)。
- , 2012a「現在を生きる『名代』の声を聴く——“移動民の子供たち”がつくる“臨場／臨床の智”」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学22号(通巻243号)。
- , 2012b「“境界領域”のフィールドワーク(2)——カーボベルデ諸島でのフィールドワークより」『中央大学社会科学研究所年報』16号。
- , 2013a「“惑星社会の諸問題”に回答するための“探究／探求型社会調査”——『3.11以降』の持続可能な社会の構築に向けて」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学23号(通巻248号)。
- , 2013b「“境界領域”のフィールドワーク(3)——生存の場としての地域社会にむけて」『中央大学社会科学研究所年報』17号。
- , 2014a『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部。
- , 2014b「A.メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに——3.11以降の惑星社会の諸問題への社会的探求(1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号(通巻253号)。
- , 2014c「A.メルッチの『創造力と驚嘆する力』をめぐって——3.11以降の惑星社会の諸問題に回答するために(1)」『中央大学社会科学研究所年報』18号。
- , 2015a「『3.11以降』の惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“限界状況の想像／創造力”——矢澤修次郎, A.メルッチ, J.ガルトウング, 古城利明の問題提起に即して」『成城社会イノベーション研究』第10巻第1号。
- , 2015b「“未発の状態／未発の社会運動”をとらえるために——3.11以降の惑星社会の諸問題への社会的探求(2)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学25号(通巻258号)。

- , 2015c 「“交感／交換／交歓”のゆくえ——「3.11以降」の“惑星社会”を生きるために」似田貝香門・吉原直樹編『震災と市民 第II巻 支援とケア：こころ自律と平安をめざして』東京大学出版会。
- , 2015d 「“受難の深みからの対話”に向かつて——3.11以降の惑星社会の諸問題に应答するために(2)」『中央大学社会科学研究所年報』19号。
- , 2016 『うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部。
- Niihara, Michinobu, 2003a, “Homines patientes e sociologia dell’ascolto,” in Luisa Leonini (a cura di), *Identità e movimenti sociali in una società planetaria: In ricordo di Alberto Melucci*, Milano: Guerini.
- , 2003b, “Il corpo silenzioso: Vedere il mondo dall’interiorità del corpo,” in Luisa Leonini (a cura di), *Identità e movimenti sociali in una società planetaria: In ricordo di Alberto Melucci*, Milano: Guerini.
- , 2008, “Alberto Melucci: confini, passaggi, metamorfosi nel pianeta uomo,” nel convegno: *A partire da Alberto Melucci ...l’invenzione del presente*, Milano, il 9 ottobre 2008, Sezione Vita Quotidiana - Associazione Italiana di Sociologia, Dipartimento di Studi sociali e politici - Università degli Studi di Milano e Dipartimento di Sociologia e Ricerca Sociale - Università Bicocca di Milano.
- , 2011, “Crisi giapponese: Conseguente al disastro nucleare degli ultimi mesi”, nel *Seminario della Scuola di Dottorato in Scienze Sociali*, Università degli Studi di Sassari.
- , 2012, “Il disastro nucleare di FUKUSHIMA. Scelte energetiche, società civile, qualità della vita”, nel *Quarto seminario FOIST su Esperienze internazionali nell’università*, Università degli Studi di Sassari.